

病害虫発生予察情報予報第6号（9月の予報）

佐賀県

目次

1. 9月の病害虫	1
2. 予報の内容・根拠等について	2
3. 9月の気象条件	2
4. 9月の予報	
<u>普通作物</u> （水稻、大豆）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	10
<u>茶</u>	19
<u>野菜</u> （イチゴ、アスパラガス）	23
5. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	29
6. <u>農薬の適正使用について</u>	30

今月のトピックス

水稻のいもち病については、圃場間で発生程度が異なります。穂への被害を防ぐため、上位葉に葉いもちが認められる圃場では、穂いもちに対する防除を徹底してください。

1. 9月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



いもち病による穂枯れ



トビイロウンカ



分生子を形成したアスパラガス褐斑病



カンキツ黒点病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085
HPアドレス <http://www.pref.saga.lg.jp/web/boujo>

2. 予報の内容・根拠等について

予報の内容（予想発生量）

- 平年（佐賀県の過去10年間）及び前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 留意点
平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

- 農業技術防除センターが実施する巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
- 病害虫の発生現況および気象条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示しています。これらを総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

- 1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。
- 3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

3. 9月の気象条件

病害虫の発生に関与する9月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成27年8月25日）における確率予報から、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による9月の要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	9月の気象予報（確率予報）			病害虫の発生に関与する気象条件
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (24.2℃)	40	並
降水量	30	40 (179.5mm)	30	並

4. 9月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病害虫名	9月の 予想発生量		病害虫防除 のてびきの 記載頁	備考
		平年比	前年比		
早植え水稲	紋枯病	やや少	やや少	152～154	
	トビイロウンカ	やや少	並	161～165	
普通期水稲	穂いもち	<u>やや多</u>	やや少	145～151	注意報第5号 参照
	紋枯病	並	やや少	152～154	
	白葉枯病	並	並	151～152	
	トビイロウンカ	やや少	並	161～165	
	コブノメイガ	並	<u>やや多</u>	171～173	
早植え水稲・ 普通期水稲	斑点米カメムシ類	やや少	並	175～178 195～197	
大豆	紫斑病	並	並	213～214	
	ハスモンヨトウ	並	<u>やや多</u>	218～219, 224～226	
	カメムシ類	並	並	220～221, 226～228	

【特記事項】

1. いもち病

本病が多発している。発生状況は圃場毎に異なるため、必ず発生状況を確認し、葉いもちが見られる圃場では穂ばらみ期～出穂期の防除を必ず実施する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも防除を行う（[注意報第5号](#)参照）。

2. トビイロウンカ

9月上～中旬に発生状況を確認し、老齢幼虫及び成虫が1株当たり5頭以上見られる圃場では臨機防除を行う。

3. もみ枯細菌病

出穂期に降雨日が多いと本病が多発しやすいので、本病を対象とした防除を出穂前後3日の間に行う。

4. 防除の際の注意事項

薬剤防除は、周辺の環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期や散布時間等を予め伝達するなどの対応をとる。

水稻（早植え）

（巡回調査日：8月21日）



巡回調査時の生育状況

1. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

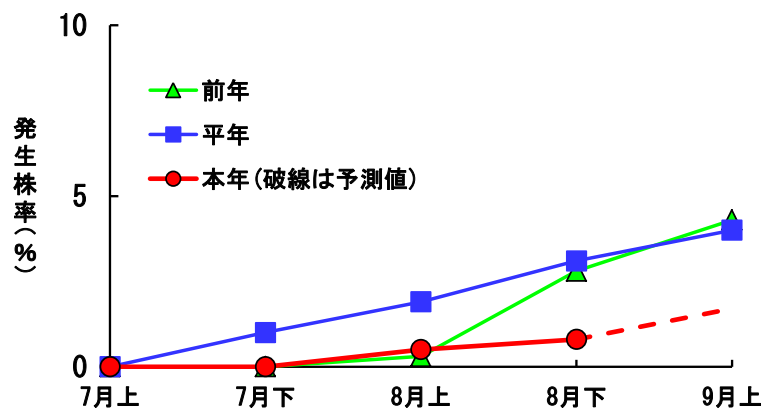
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は0.8%（平年3.1%、前年2.8%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-~±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病の発生状況は圃場によって異なるので、各圃場を見まわり、病斑が上位第3葉鞘まで達している場合は防除を行う。



2. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

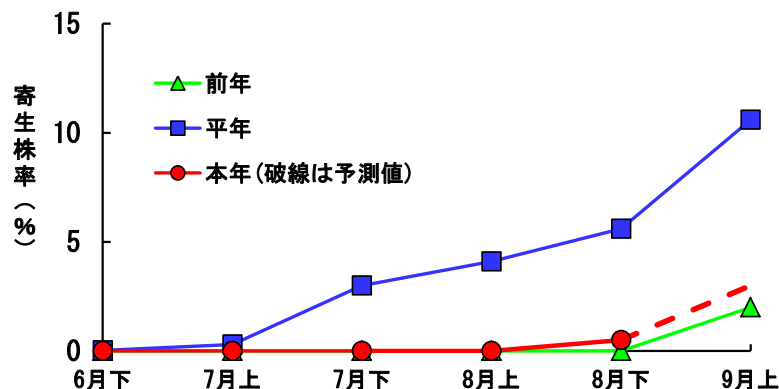
(1)巡回調査では、寄生株率は0.5%（平年5.7%、前年18.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生状況は圃場毎に異なるため、必ず各圃場毎に払い落とし法によって発生状況を確認し、防除の要否を決定する。

(2)その他は特記事項を参照。



水稻（普通期水稻）

（巡回調査日：8月20～24日）



巡回調査時の生育状況

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

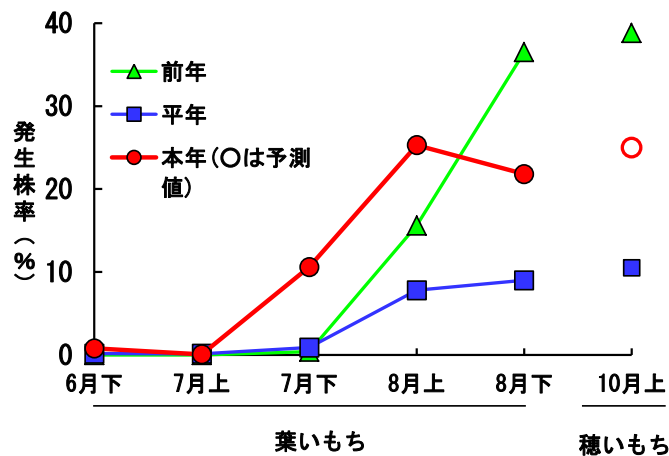
(1)巡回調査では、葉いもちの発生株率は21.8%（平年9.0%、前年36.5%）であり、平年よりやや多く前年よりやや少ない。〈±～+〉

病斑の葉位は大半の圃場が上位2～4葉であるが、一部圃場では止め葉に発生がみられている。また、病斑の多くが停止型病斑であるが、進展型病斑がみられる圃場もある。

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照。



2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

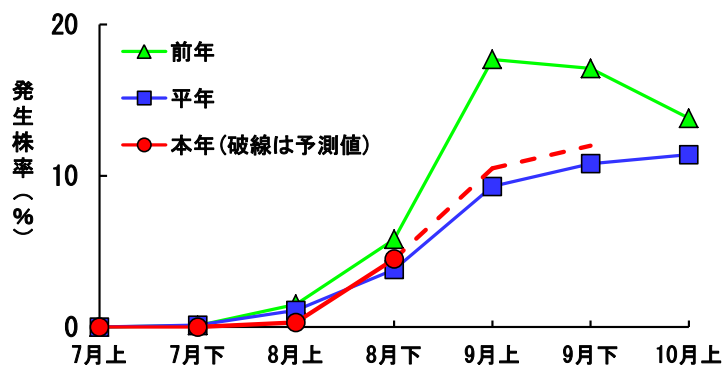
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は4.5%（平年3.8%、前年5.8%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病の発生状況は圃場によって異なるので、各圃場を見まわり、病斑が上位第3葉鞘まで達している場合は防除を行う。



3. 白葉枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)本病の発生圃場では、露が水稻に付着している時間帯は圃場へ入らない。

4. トビイロウンカ

1) 予報の内容

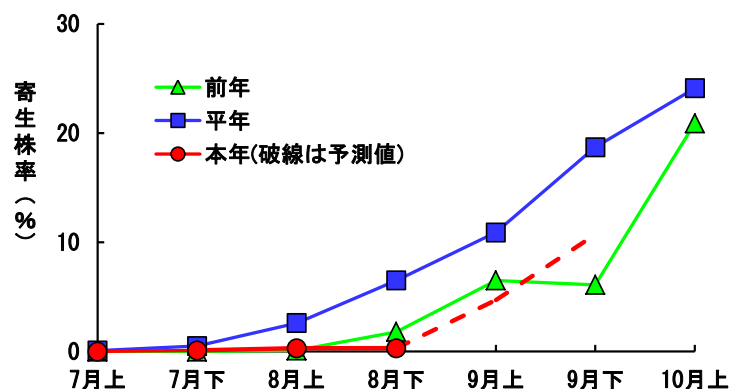
発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、寄生株率は0.3%（平年6.5%、前年1.8%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (2)8月5半旬のウンカ無防除圃場（普通期）調査の結果、株当たり虫数は0.04頭（H25年6.8年、前年0.5頭）とH25年よりやや少なく、平年並であった。〈-~±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生状況は圃場毎に異なっている。このため、必ず、各圃場毎に払い落とし法（25株程度）によって発生状況を調査し、防除の要否を決定する。
- (2)その他は特記事項を参照。



5. コブノメイガ

1) 予報の内容

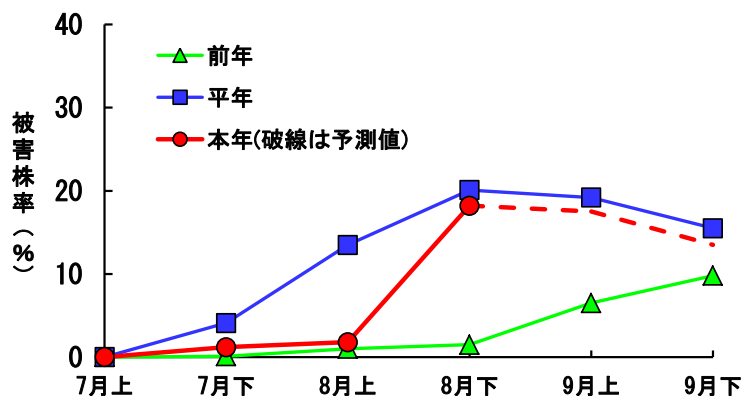
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、被害葉の発生株率は18.2%（平年20.1%、前年1.5%）であり、平年並で前年より多い。一部で多発生圃場がみられる。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発蛾最盛期を各地域で確認する。特に、「さがびより」、「ヒヨクモチ」等の品種や肥料の効いた圃場で、成虫の発生が多い場合には発蛾最盛期の約1週間後に防除を行う。



水稻（早植え・普通期）

1. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) イネ科雑草での捕虫網によるすくい取り調査（8月20～24日）では、カメムシ類の発生は平年よりやや少なく前年並である（表1）。〈－～±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い防除要否を判断する（防除の目安は、穂揃い期～乳熟期に水田内の20回すくい取りで5頭以上）。
- (2) 多発生の場合は穂揃い期と乳熟期の2回防除を行う。少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2015年8月20～24日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市①	空き地	エノコログサ類	1	0	1	1	0	0	1	0	0
佐賀市②	空き地	エノコログサ類	4	0	1	0	0	0	1	0	0
佐賀市③	道端	エノコログサ類	0	0	2	0	1	0	0	0	0
佐賀市④	道端	エノコログサ類	0	0	1	0	0	0	6	2	0
佐賀市⑤	道端	エノコログサ類	0	1	0	0	0	0	0	0	0
唐津市相知町	空き地	エノコログサ類	0	2	7	1	0	0	18	3	0
小城市三日月町	道端	エノコログサ類	0	0	2	1	0	0	1	4	0
伊万里市①	空き地	エノコログサ類	1	3	4	0	0	2	32	6	0
伊万里市②	道端	エノコログサ類	0	0	0	1	3	1	13	9	0
嬉野市塩田町	空き地	エノコログサ類・オシバ	4	61	3	0	0	1	14	2	0
上峰町①	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	4	0	0
上峰町②	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	0	1	0
白石町①	道端	エノコログサ類	2	15	0	0	0	0	0	0	0
白石町②	道端	エノコログサ類	2	0	1	1	0	0	3	0	0
白石町③	空き地	エノコログサ類	1	0	0	0	0	0	36	82	0
平均（本年）			1.0	5.5	1.5	0.3	0.3	0.3	8.6	7.3	0.0
前年			1.4	1.6	0.8	0.1	0.3	0.1	1.3	0.0	0.25
平年（過去10年の平均）			3.4	10.3	2.9	1.3	1.0	2.2	26.2	9.0	0.03

大豆

(巡回調査日：8月20～24日)



巡回調査時の生育状況

1. 紫斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 若莢期～子実肥大中期に、防除を実施する。

2. ハスモンヨトウ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
(1) 巡回調査では、寄生株率は1.2%（平年1.6%、前年0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
(2) 県内9地点のフェロモントラップでの誘殺数は平年並で推移している（図1）。〈±〉
(3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 上位葉で白変葉（若齢幼虫の集団による被害）が増加し始めた時が防除適期である。必ず圃場を見回り、白変葉の発生状況を確認し、防除を実施する。
(2) 防除後も、新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。

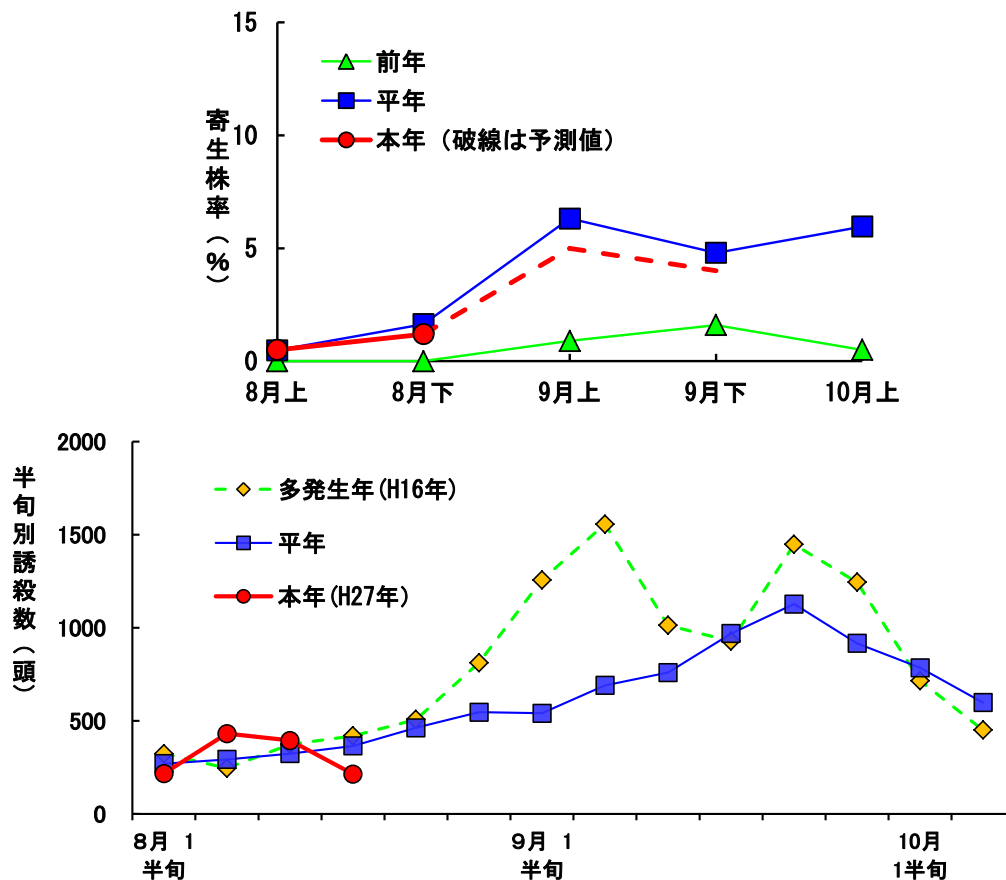


図1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

3. カメムシ類 (アオクサカメムシ, イチモンジカメムシ, ホソヘリカメムシ, ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

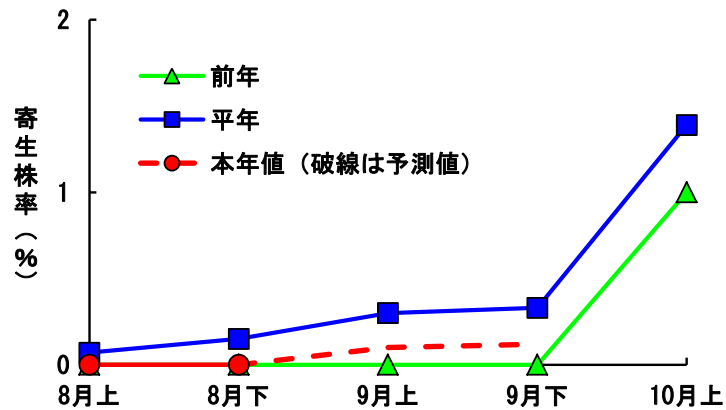
(1) 巡回調査では、発生を認めていない（寄生株率：平年0.2%、前年0%）。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の防除は莢の伸長初期～子実肥大中期（9月中旬頃まで）が効果的である。
発生が多い場合には7～10日間隔で2～3回防除を行う。

(2) 防除に当たっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。



果 樹

【概要】

作物名	病害虫名	9月の 予想発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	<u>やや多</u>	<u>多</u>	234～237	
	黒点病	<u>やや多</u>	並	232～234	
	ミカンハダニ	並	並	259～263	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	252～259	
ナシ	黒星病	<u>多</u>	<u>多</u>	298～303	注意報第2号 参照
	ナシヒメシクイ	並	並	314～317	
	ハダニ類	並	<u>多</u>	320～323	
ブドウ	べと病	<u>やや多</u>	<u>多</u>	344～346	注意報第3号 参照
	褐斑病	<u>やや多</u>	<u>多</u>	347～348	
果樹全般	カメムシ類	やや少	並	カンキツ：266～269 ナシ：318～319 ブドウ：360～361	病害虫対策資料第10号 参照

【特記事項】

【カンキツ】

1. かいよう病

台風襲来、その他強風雨が予想される場合は、襲来前までに必ず防除を行う。

2. 黒点病

本病の防除では、マンゼブ剤散布後の積算降雨量が200mm～250mmに達した時点または散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。ただし、マンゼブ剤を含む薬剤の使用回数（4回以内）に注意する。

3. 果実腐敗

早熟系早生温州みかんでの薬剤防除を徹底する。

4. ミカンサビダニ

本種による被害果が認められる園では早急に防除を行う。

【ナシ】

1. 黒星病

本病の翌年の伝染源となる鱗片等への感染を防止するために、収穫終了後も防除を徹底する（[注意報第2号](#)参照）。

2. 輪紋病

果実が過熟になると本病の発生が助長されるので、適期に収穫する。また、本病の初期病斑は小さくてわかりにくいいため、収穫時の選別を徹底する。

【ブドウ】

1. ベと病・褐斑病

べと病及び褐斑病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のために、収穫終了後も防除を徹底する（[注意報第3号](#)参照）。

2. 晩腐病

果実が過熟になると本病が発生しやすくなるため、適期に収穫する。

【果樹全般】

1. 果樹カメムシ類

ヒノキ毬果における口針鞘数を基に算出したカメムシ類新世代のヒノキ毬果からの離脱時期は、地点によるバラつきが多いが、概ね8月5半旬頃と予想され、果樹園への飛来が予想される。こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う（[病害虫対策資料第10号](#)参照）。

カンキツ

（巡回調査日：8月18～20日）



巡回調査時の生育状況

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない。（発病葉率：平年0.4%、前年0%、発病果率：平年0.2%、前年0%）〈-～±〉

(2)巡回調査地点以外の圃場において、本病の発生を確認している。〈±～+〉

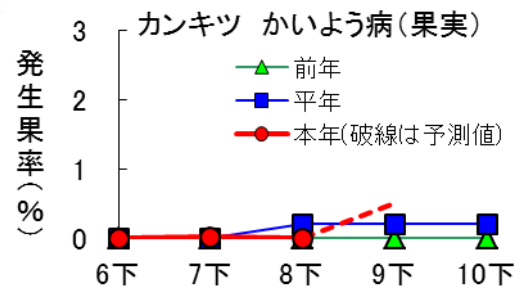
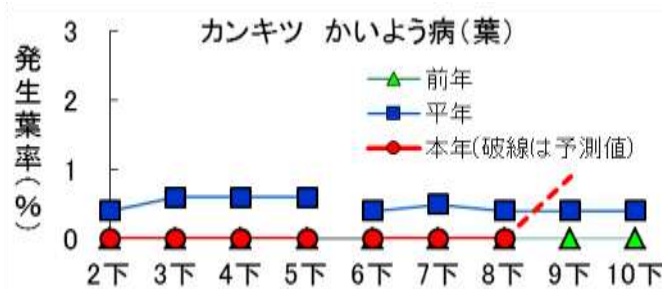
(3)台風15号の通過により、果実や葉に風傷が発生しており本病の感染に好適な条件となっている。〈+〉

(4)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、いよかん、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）による防除を行う。散布間隔は20～25日とする。

(2)その他事項は特記事項参照。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年並）

2) 予報の根拠

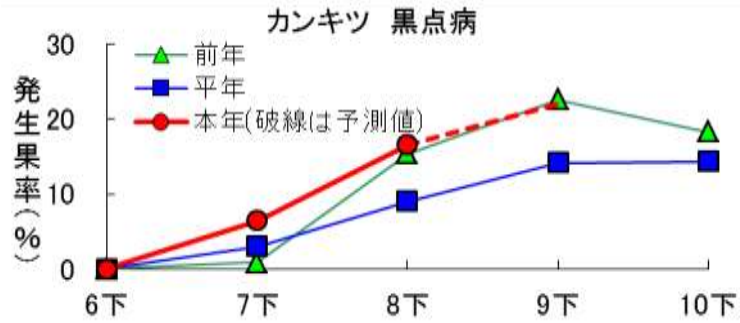
(1)巡回調査では、発生果率は16.6%（平年9.0%、前年15.4%）であり、平年よりやや多く前年並である。〈±～+〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

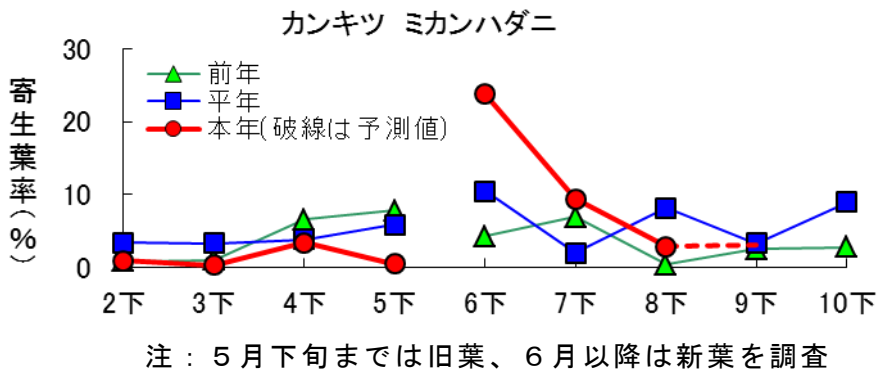
(1)防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。

- (2) 枯れ枝は本病の伝染源となるので、除去し、処分する。
- (3) その他事項は特記事項参照。



3. ミカンハダニ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 巡回調査では、寄生葉率は2.9%（平年8.2%、前年0.4%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
 - (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
 - (2) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5～1頭）に防除を行う。



ナシ

(巡回調査日：8月18日)

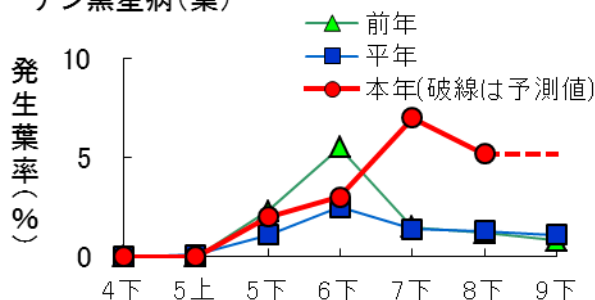


巡回調査時の生育状況

1. 黒星病

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 巡回調査（調査対象品種「幸水」）では、発生葉率は5.2%（平年1.3%、前年1.2%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉
 - (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 晩生品種を混植（近接）している園や団地では、薬液の飛散を防止するとともに、使用する薬剤の選定（収穫前使用日数等）には十分注意する。
 - (2) その他事項は特記事項参照。

ナシ黒星病(葉)



2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

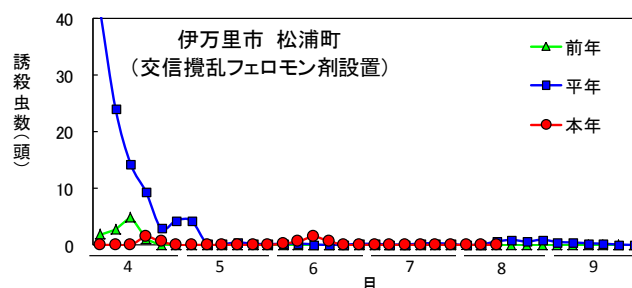
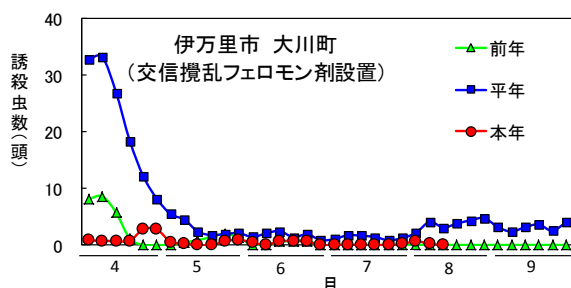
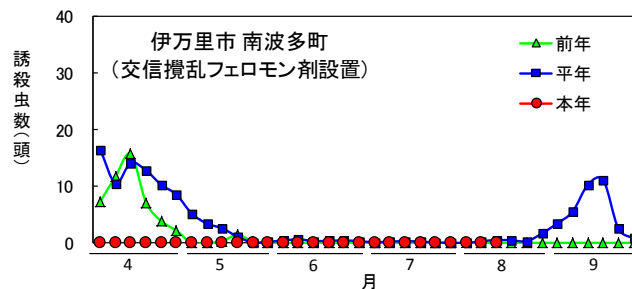
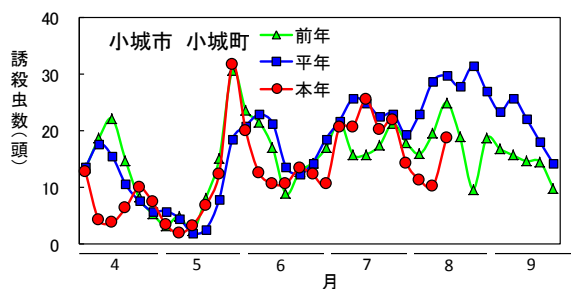
2) 予報の根拠

(1) フェロモントラップでの8月1半旬～8月4半旬の誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。〈-～±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。



フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺推移
(小城市は果樹試験場、伊万里市は西松浦農業改良普及センター調査)

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

2) 予報の根拠

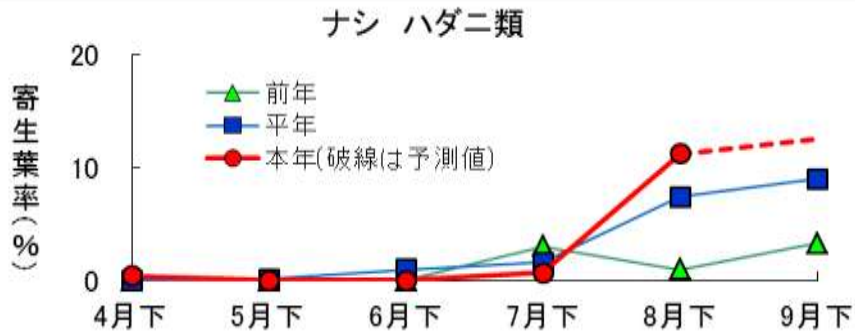
(1) 巡回調査では、寄生葉率は11.2%（平年7.4%、前年1.0%）であり、平年並で前年より多い。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

(2) ハダニ類は、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数0.5頭以下）に防除を行う。



ブドウ

(巡回調査日：8月18日～20日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

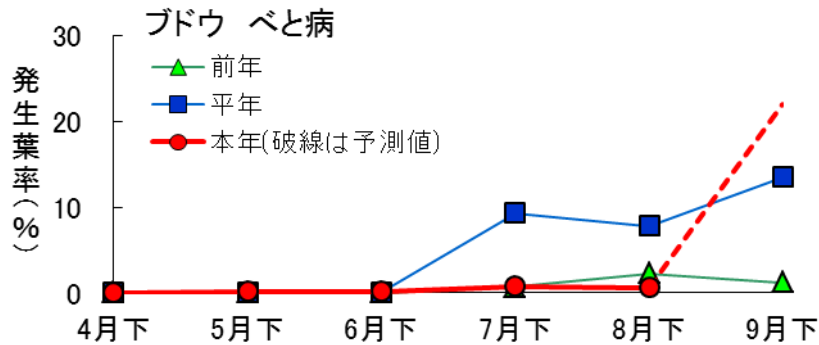
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生葉率は0.6%（平年7.8%、前年2.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2) 巡回調査地点以外で、本病が多発生している圃場が一部みられ、落葉・房枯している圃場もみられる。〈+〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨によって発病が進展するので、降雨前の予防散布を行う。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）は耐性菌が発生しているため、本病の防除に使用しない。
- (3) その他事項は特記事項参照。



2. 褐斑病

1) 予報の内容

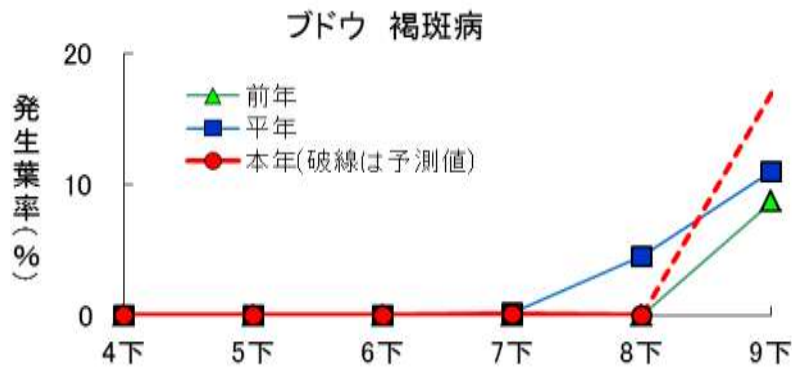
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生葉率：平年4.5%、前年0%）。〈-～±〉
- (2) 巡回調査地点以外で、本病の発生を確認している。〈±～+〉
- (3) 8月中旬以降、降雨が多く、本病の感染に好適な条件で推移している。〈±～+〉
- (4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病原菌は気孔から侵入するので、葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 罹病葉は、二次伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- (3) その他は特記事項参照。



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生量

- ①フェロモントラップ（図1：県平均、図2：各地点別）及び予察灯（図3：県平均、図4：各地点別）による誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。〈ー～±〉
- ②8月中下旬に行ったヒノキ毬果における寄生数調査では、1地点あたりの成幼虫数は2.4頭（平年15.6頭、前年22.7頭）で、平年及び前年より少ない（表1）。〈ー〉
- ③県内各地で採集したヒノキ毬果における8月中下旬の平均口針鞘数は14.0本/果（平年12.5本、前年11.1本）で、平年及び前年並である（表1）。〈±〉
- ④気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

(2) 果樹園への飛来時期

- ①カメムシ類はヒノキ毬果の種子を餌とする。調査地点におけるヒノキ毬果の着果程度は「極少～少」である（表1）。
- ②ヒノキ毬果における口針鞘数を基に算出した果樹カメムシ類新世代のヒノキ毬果からの平均離脱時期は、8月5半旬頃と予想される。ただし、地点によるバラつきが大きく、毬果が少ないため、上記よりも飛来時期が早い可能性がある。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめに園内を見て回り、飛来を確認した場合は早急に防除を行う。
- (2) 県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「[病害虫データ情報](#)」を参照する。
- (3) その他は特記事項参照。

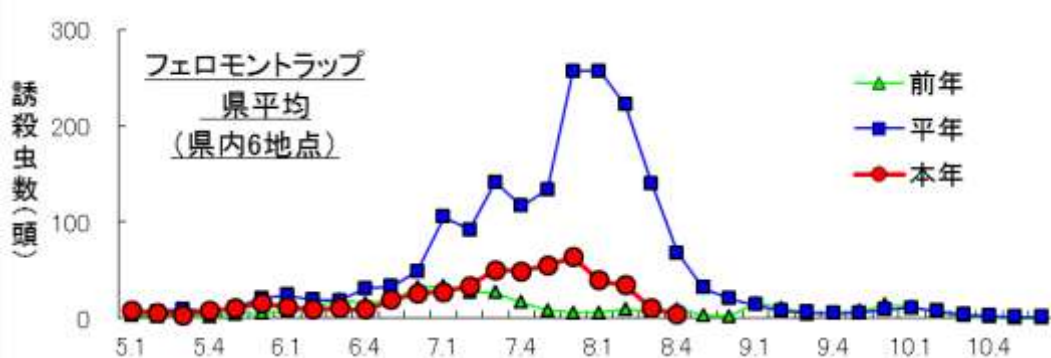


図1 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺推移（県内6地点平均）

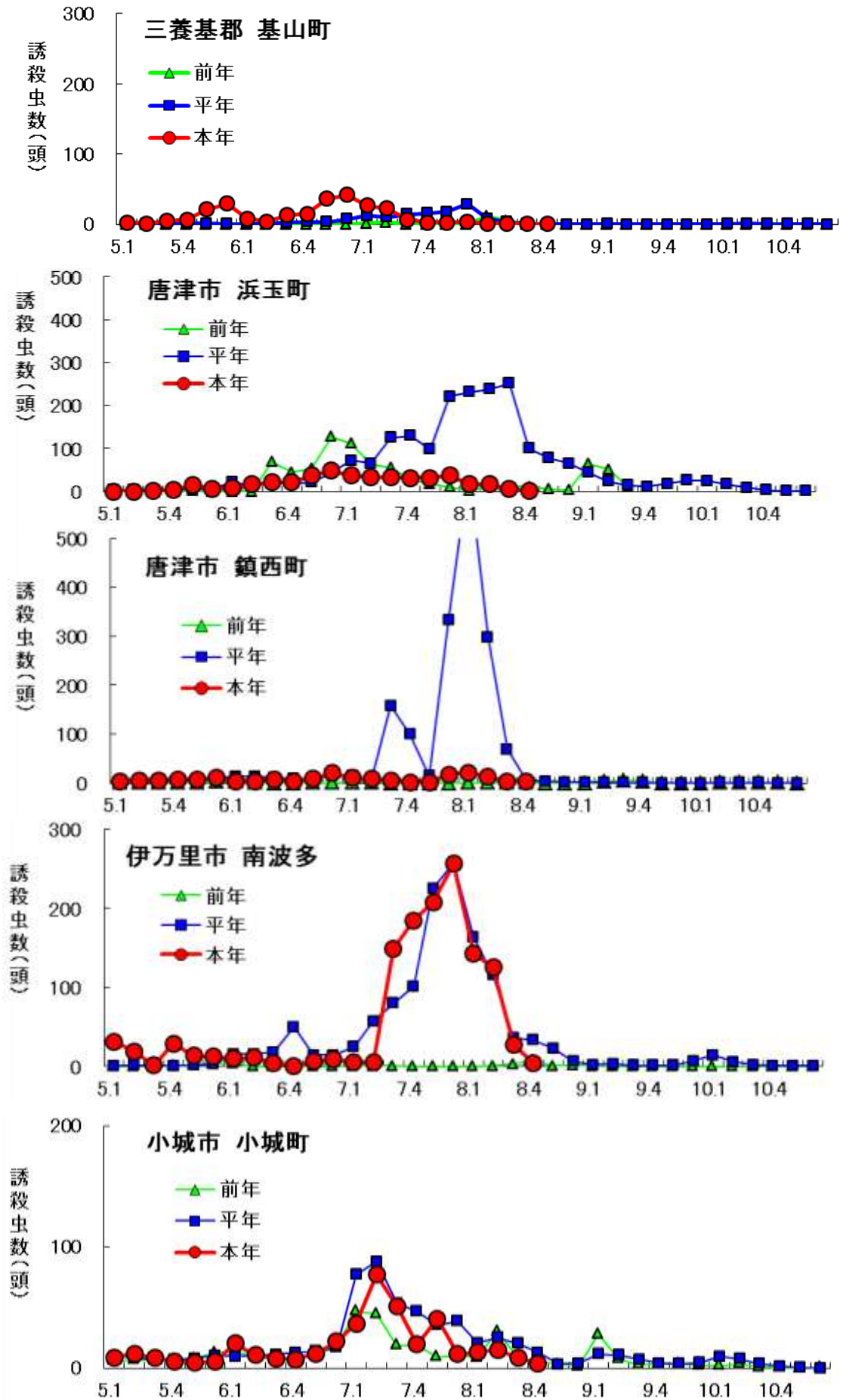


図2 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺推移 (各地点別)

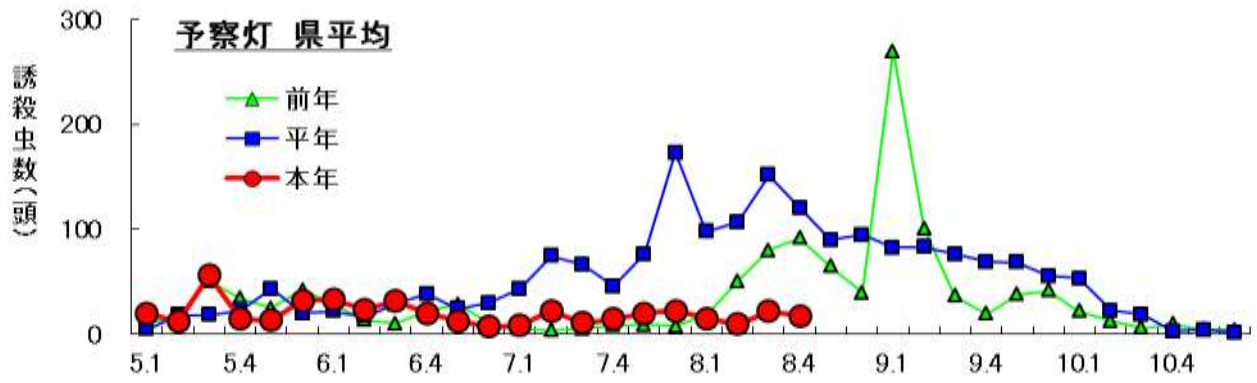


図3 予察灯による果樹カメムシ類の誘殺推移 (県内3地点平均)

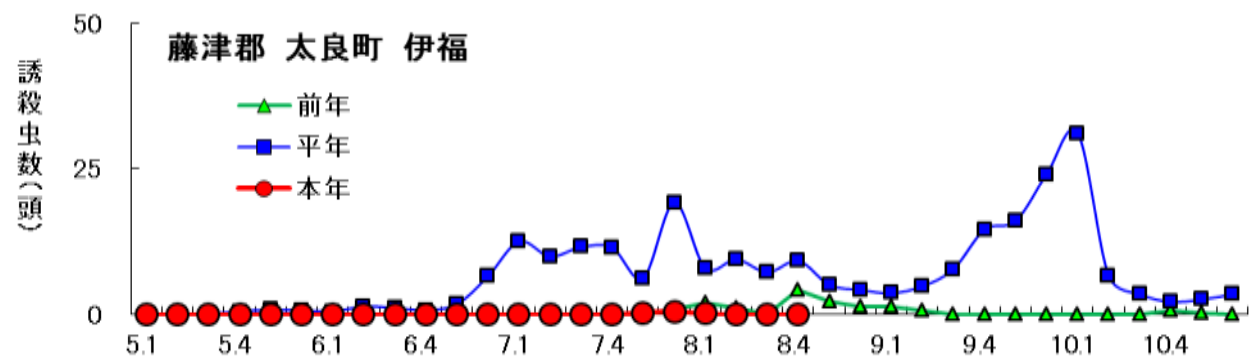
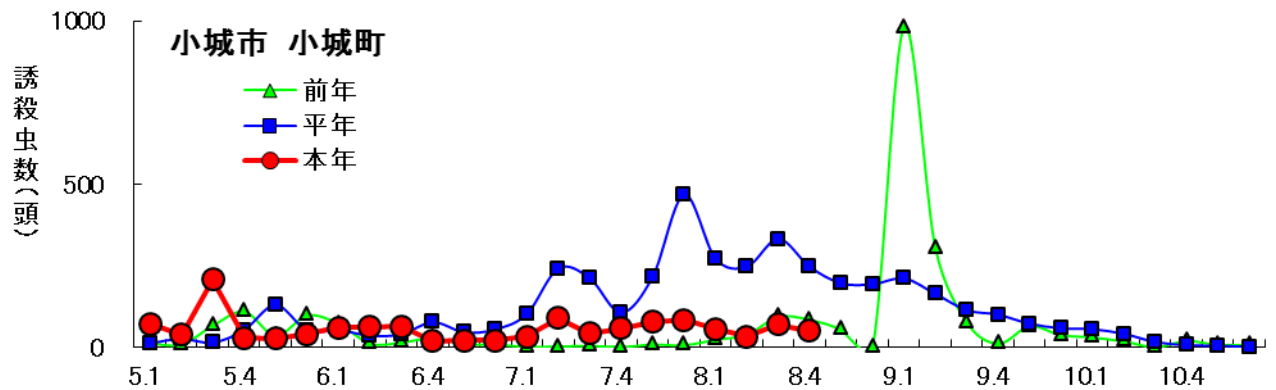
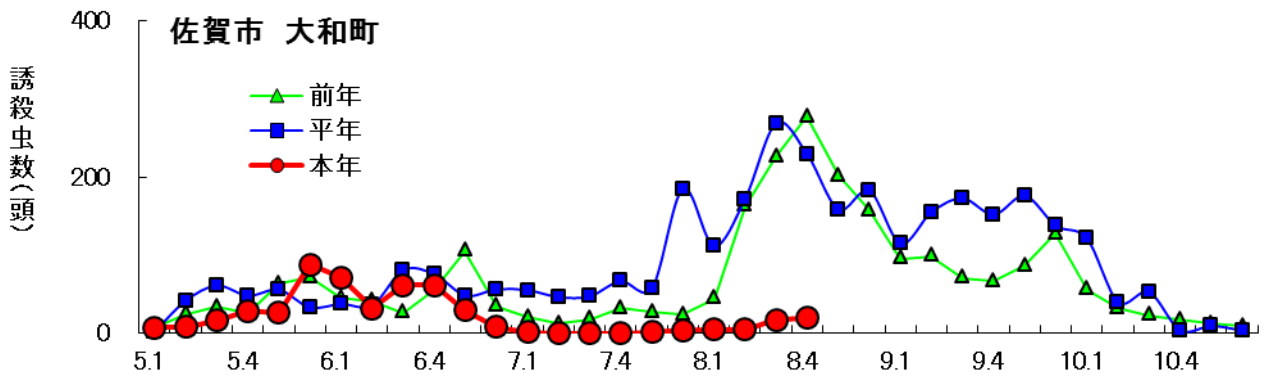


図4 予察灯による果樹カメムシ類の誘殺推移 (各地点別)

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況					離脱予想時期 (各調査日から算出)	口針鞘数			ヒノキ毬果 2) 着果程度
		7月 下旬 合計	8月 月上旬 合計	8月上旬		8月 月下旬 合計		7月 下旬	8月 月上旬	8月 月下旬	
				成虫 ¹⁾	幼虫						
1	上峰町	3	2	2	1	3	9月6半旬頃～	0.5	9.2	4.3	やや少
2	神埼市	0	2	0	0	0	9月4半旬頃～	0.0	1.1	7.2	やや少
3	小城市	4	9	1	2	3	9月1半旬頃～	1.8	12.0	11.1	少
4	多久市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
5	唐津市 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
6	唐津市 2	23	1	1	2	3	8月1半旬頃～	1.1	10.6	20.1	少
7	伊万里市 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
8	伊万里市 2	6	1	0	0	0	7月5半旬頃～	0.7	10.9	24.9	少
9	伊万里市 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
10	白石町	6	2	2	5	7	8月6半旬頃～	0.1	3.0	12.2	少
11	鹿島市 1	3	-	-	-	-	-	0.2	-	-	少
12	鹿島市 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
13	鹿島市 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
14	太良町 1	16	14	1	0	1	8月2半旬頃～	3.0	15.6	18.4	少
15	太良町 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
	平均	7.6	4.4	1.0	1.4	2.4	8月5半旬頃～	0.9	8.9	14.0	少
	平年	12.7	14.1			15.6	-	1.8	5.5	12.5	
	前年(H26年)	10.6	16.2			22.7	-	0.7	5.5	11.1	やや多

1)チャバネアオカメムシの寄生が主であった。

2)ヒノキ毬果着果程度：福岡総農試の達観調査法（一部改変）に基づいて調査

- ・極少：ほとんど結実が見あたらない
- ・少：梢頭部にわずかに結実
- ・やや少：梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中：梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多：梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多：梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多：梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実
- ・極多：梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

茶

【予報の概要】

作物名	病害虫名	9月の 予想発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
茶	炭疽病	並	やや少	411～412	
	輪斑病	<u>多</u>	<u>多</u>	412～413	
	カンザワハダニ	<u>多</u>	<u>多</u>	418～419	病害虫対策資料 第6号 参照
	クワシロカイガラムシ	並	並	427～428	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423～424	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	425～426	
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並	421～423	
	チャノホソガ	並	並	420～421	

【特記事項】

1. 輪斑病

整枝時の傷口から感染しやすいため、**整枝後は直ちに防除**を行う。

2. カンザワハダニ

多発してからでは防除効果があがりにくいいため、**低密度時からの防除**を徹底する。特に一番茶期に発生が多かった茶園では、茶園観察を十分に行う。また、葉裏に生息するハダニに薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

3. もち病

本年は二番茶での発生が多かったため、**秋芽生育初期の防除**を行う。今後、秋雨時期に新芽伸長期（展葉期）にある茶園は、秋芽の開葉初期と3葉期頃の2回防除を行う。

4. チャノキイロアザミウマ・チャノミドリヒメヨコバイ

今後秋にかけて発生が増えるため、**開葉期の防除**を行う。多発生園では、最初の防除から一週間後にも追加防除を行う。

5. チャトゲコナジラミ

既発生地では防除を徹底する。また、未発生地において疑わしい葉を見つけた場合には、すぐに関係機関へ連絡する。防除対策は、ホームページ掲載の「[チャトゲコナジラミの防除対策](#)」を参照する。



巡回調査時の生育状況

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、1 m²あたりの発病葉数は4.0枚（平年6.2枚、前年10.6枚）であり、平年並で前年よりやや少ない。〈±〉

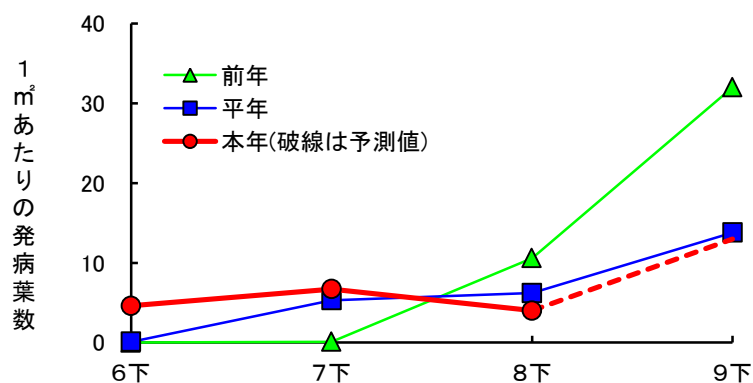
(2)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)秋芽の充実と翌年への伝染源を抑えるために、秋芽生育期（萌芽～三葉期）の防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3)本菌は罹病葉で越冬するため、発生園は整枝により罹病葉を除去し、日当たりおよび通風をよくする。



2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

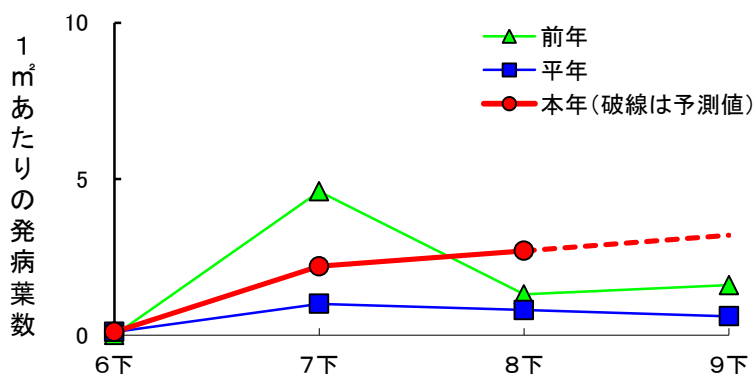
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、1 m²あたりの発病葉数は2.7枚（平年0.8枚、前年1.3枚）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照。



3. カンザワハダニ

1) 予報の内容

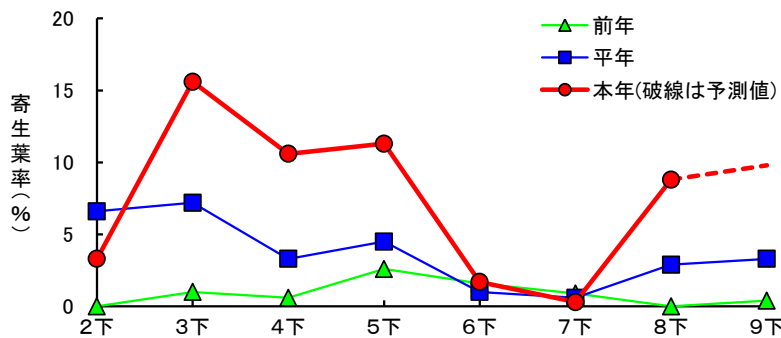
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生葉率は8.8%（平年2.9%、前年0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉
- (2) 8月上旬に、本虫の生育に好適な条件で推移した。〈±～+〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。
- (2) その他については特記事項を参照。



4. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

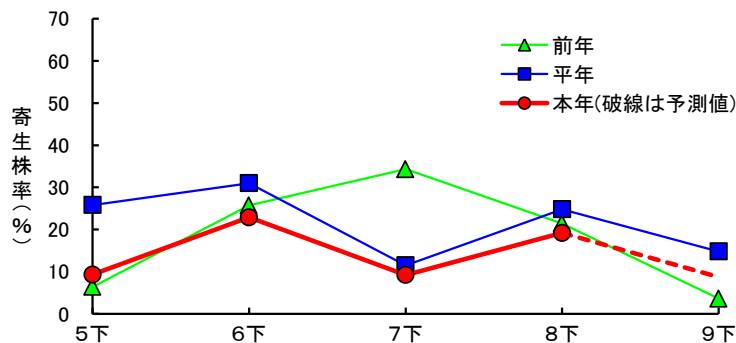
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は19.2%（平年24.8%、前年21.4%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 防除適期である第三世代幼虫ふ化最盛期は9月中～下旬である。ふ化状況を確認し、適期に防除を行う。
- (2) 第三世代は幼虫ふ化期がばらつくため、多発園では7～14日間隔で二回防除を行う。
- (3) 薬液散布は専用ノズルを用い、1000L/10aを目安に薬液が枝全体にかかるよう丁寧に散布する。



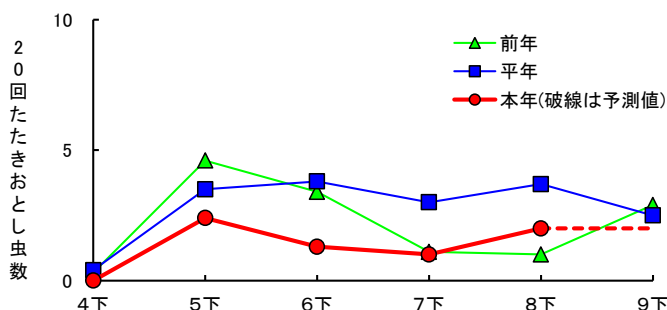
5. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

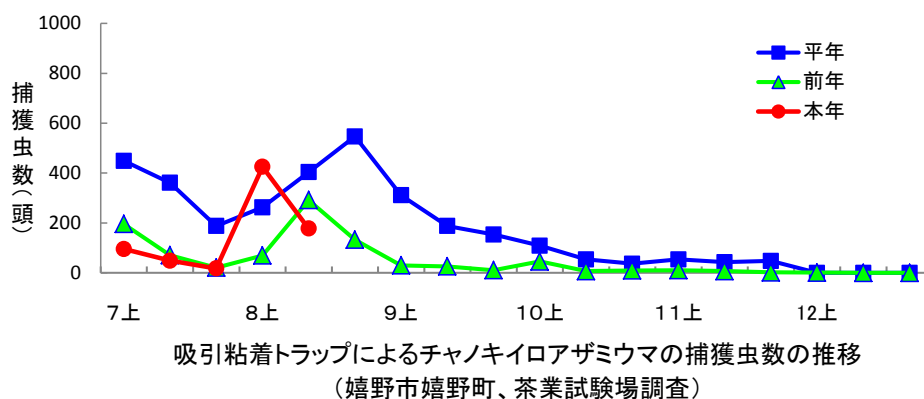
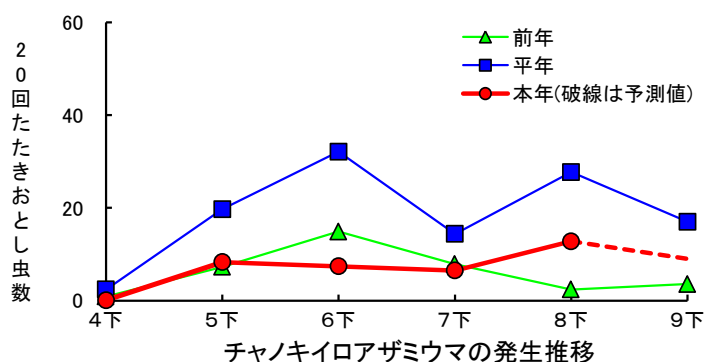
2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は2.0頭（平年3.7頭、前年1.0頭）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉
- 3)防除上注意すべき事項
- (1)幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏にも薬剤が十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2)その他については特記事項を参照。



6. チャノキイロアザミウマ

- 1)予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2)予報の根拠
- (1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は12.8頭（平年27.7頭、前年2.4頭）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2)吸引粘着トラップによる7月下旬～8月中旬の誘殺虫数は、平年及び前年並である。〈±〉
- (3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉
- 3)防除上注意すべき事項
- (1)幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3)その他については特記事項を参照。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	9月の 予想発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや少	少	194～196	
	苗立枯症	並	並	198～203	病害虫対策資料第12号 参照
	ハダニ類	並	並	204～205	病害虫対策資料第5号 参照
	アブラムシ類	並	やや多	210～211	
アスパラ ガス	茎枯病	やや多	多	313～314	
	褐斑病	多	やや多	314～315	
	斑点病	やや多	やや多	314	
	アザミウマ類	並	並	317	
	ハダニ類	やや少	やや少	317～318	
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ)	並	並	160～162 イチゴ：206～207 アスパラガス：316、319	

【特記事項】

【イチゴ】

1. 苗立枯症（炭疽病）
各地で炭疽病が発生した圃場が認められる。本病が育苗後期に発生すると、苗の感染が拡大し**本圃定植後の発生につながる**ため、防除を徹底する。（病害虫対策資料12号を参照）
2. 次年度用の親株
次年度に向け**優良原種苗を利用**するなど健全株を確保する。
3. ハダニ類
苗による**本圃への持ち込みを防ぐ**ため、不要な下葉を除去し薬剤防除を徹底する。感受性低下を避けるため、薬剤は育苗期～本圃を通じ、**特定の薬剤に偏らないよう選択**する。薬剤感受性に関する情報等は[病害虫対策資料第5号](#)を参照する。

【アスパラガス】

1. 茎枯病、褐斑病、斑点病
8月25日に本県の近くを通過した台風15号により、これらの発生圃場では病原菌の感染が拡大したと考えられるため、施設開口部をより大きく開放して**圃場内の通風**を図るとともに**薬剤防除**を徹底する。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：8月21日～24日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

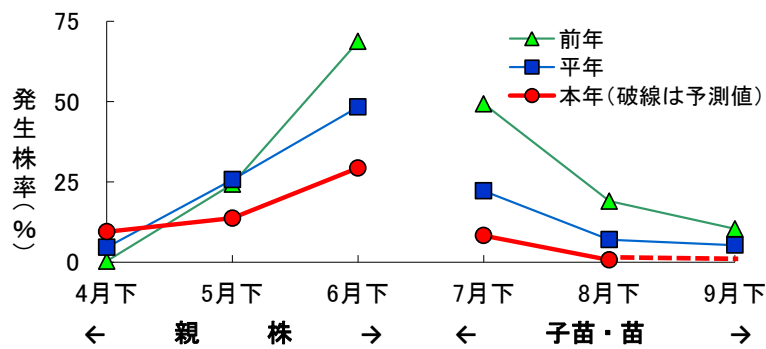
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は0.7%（平年7.0%、前年19.0%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病菌はイチゴ苗上で越夏し秋季に再発生する。本圃での発生を抑えるため、苗での薬剤防除を約10日間隔で継続する。（H25年度佐賀県農業試験研究センター研究成果情報、<https://www.pref.saga.lg.jp/web/nouse.html>）



2. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

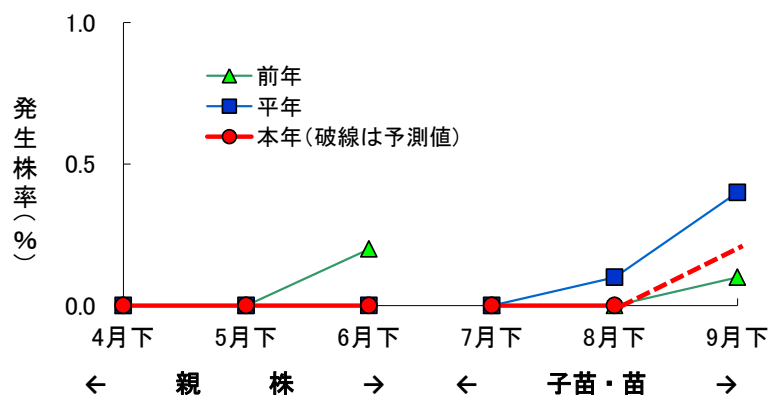
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0.1%、前年0%）。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照する。



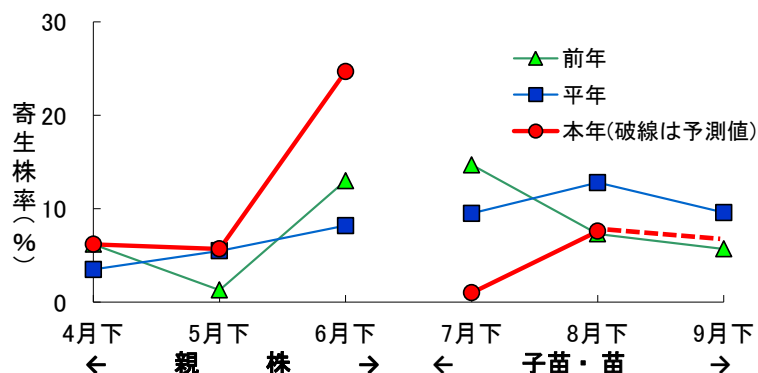
3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は7.6%（平年12.8%、前年7.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。（-～±）
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 特記事項を参照する。



アスパラガス

（巡回調査：8月21～22日）



巡回調査時の生育状況

1. 茎枯病

1) 予報の内容

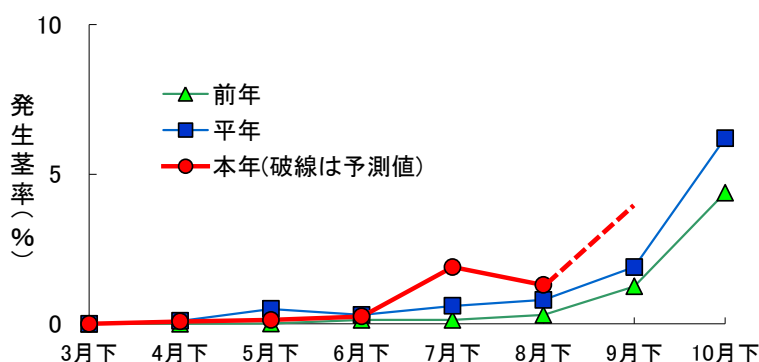
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は1.3%（平年0.8%、前年0.3%）であり、平年並で前年よりやや多い。（±）
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。（±）
- (3) 8月25日に本県の近くを通過した台風15号により、本病の発生圃場では感染が拡大したと考えられる。（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病が多発生すると次年度の萌芽が減少する。今後の発生を抑えるため、罹病茎の除去、処分及び薬剤防除を徹底する。
- (2) その他については特記事項を参照する。



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は15.6%（平年8.7%、前年5.6%）であり、平年及び前年より

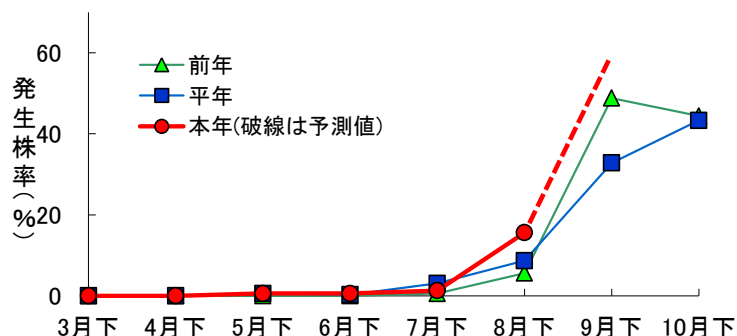
やや多い。〈±～+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

(3) 8月25日に本県の近くを通過した台風15号により、本病の発生圃場では感染が拡大したと考えられる。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照する。



3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

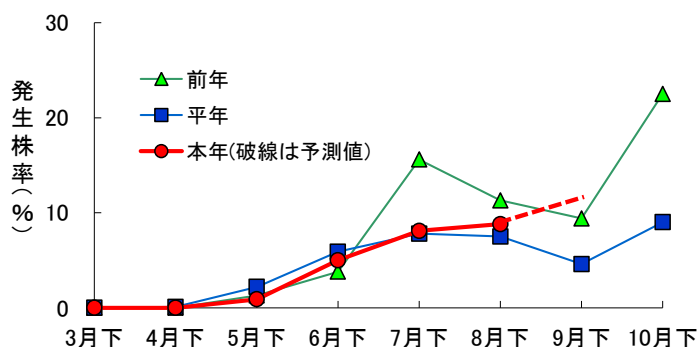
(1) 巡回調査では、発生株率は8.8%（平年7.5%、前年11.3%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

(3) 8月25日に本県の近くを通過した台風15号により、本病の発生圃場では感染が拡大したと考えられる。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照する。



4. アザミウマ類（ネギアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

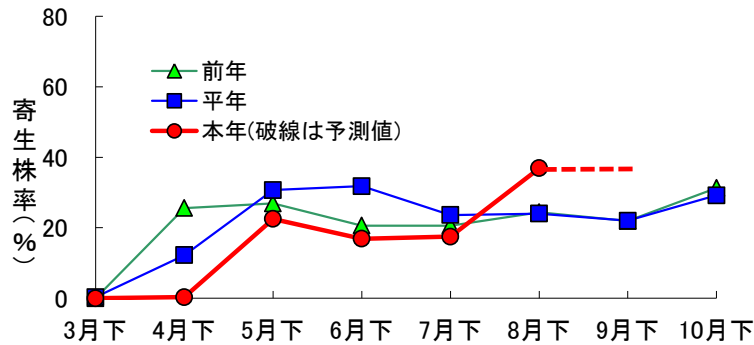
(1) 巡回調査では、寄生株率は36.9%（平年24.0%、前年24.4%）であり、平年および前年よりやや多い。梅雨明け後に薬剤防除が実施できず多発生となった圃場が認められた。

〈±～+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発生後の防除は困難であるため、低密度時から防除を徹底する。



5. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

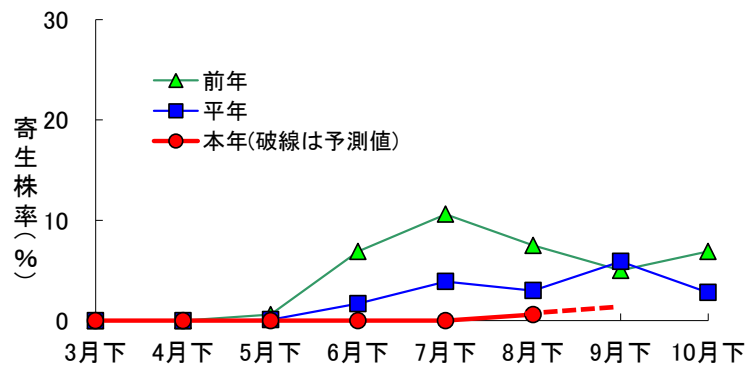
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は0.6%（平年3.0%、前年7.5%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-~±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) ハダニ類の発生程度は圃場間差が大きいため、発生状況を把握し、低密度時から防除を徹底する。



野菜・花き共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、イチゴにおける食害を認めていない（食害株率：平年0.7%、前年1.0%）（図1）。また、アスパラガスにおいても食害を認めていない（同：平年2.8%、前年0%）（図2）。〈-~±〉

(2) フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は、平年並~やや少なく推移している（図3~5）。〈-~±〉

(3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎の発生状況を確認し本虫が若齢期のうちに防除する。また、本圃定植前の苗での防除を徹底する。

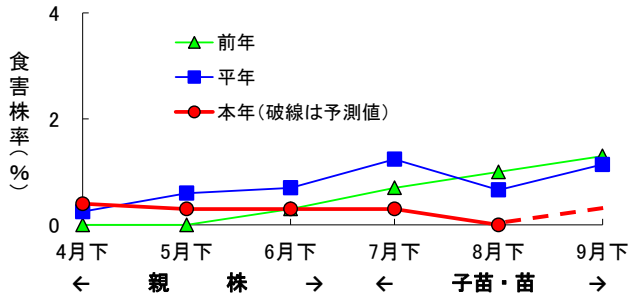


図1 イチゴ苗でのチョウ目害虫による食害株率の推移

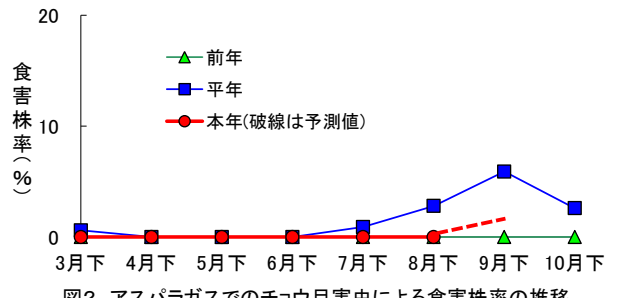


図2 アスパラガスでのチョウ目害虫による食害株率の推移

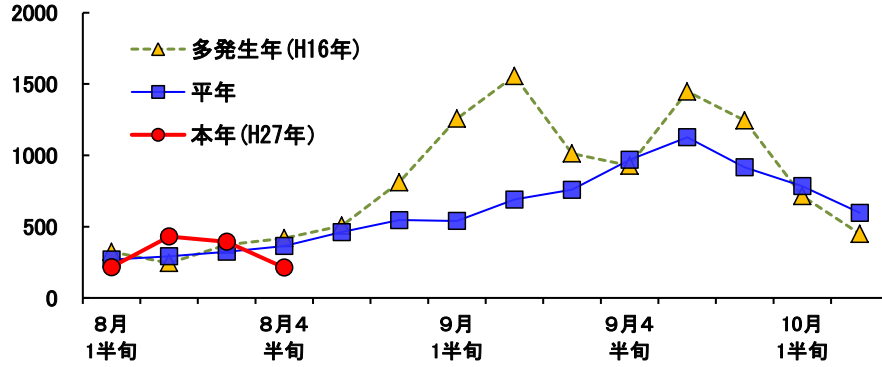


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数(10月2半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。)

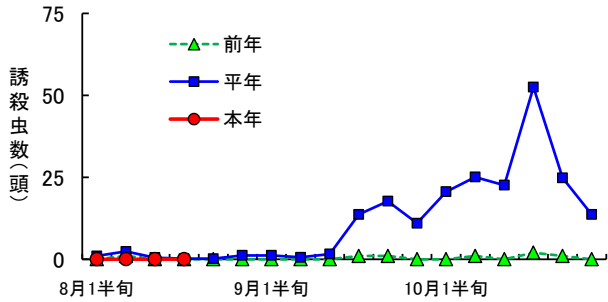


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

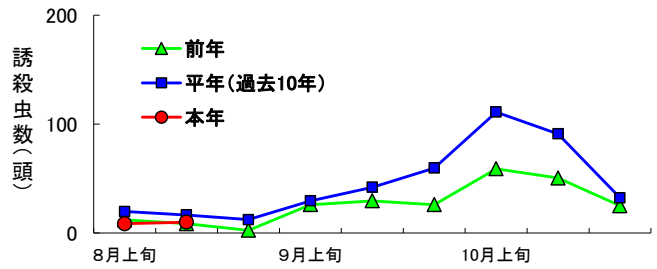


図5 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

5. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に7月25日～8月26日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
山口県	注意報	2015/7/27	水稻	いもち病
岐阜県	注意報	2015/7/29	果樹類	果樹カメムシ類
広島県	注意報	2015/7/29	水稻	いもち病
宮城県	注意報	2015/7/29	水稻	斑点米カメムシ類
岩手県	注意報	2015/7/30	水稻	いもち病
岩手県	注意報	2015/7/30	水稻	カメムシ類
岩手県	注意報	2015/7/30	りんどう	ハダニ類
熊本県	注意報	2015/7/30	水稻	いもち病
鳥取県	注意報	2015/8/3	水稻	斑点米カメムシ類
三重県	注意報	2015/8/3	果樹全般	果樹カメムシ類
宮崎県	注意報	2015/8/3	水稻	いもち病
熊本県	注意報	2015/8/5	果樹類	果樹カメムシ類
熊本県	注意報	2015/8/5	トマト	葉かび病
北海道	注意報	2015/8/5	水稻	アカヒゲホソミドリカスミカメ
秋田県	注意報	2015/8/7	水稻	斑点米カメムシ類
福岡県	注意報	2015/8/10	水稻	いもち病
茨城県	注意報	2015/8/11	水稻	クモヘリカメムシ
長崎県	注意報	2015/8/18	イチゴ	ハダニ類
愛媛県	注意報	2015/8/20	水稻	いもち病

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）				
発信元	日付	作物	内容	
徳島県	2015/7/31	モモ、ウメ、スモモ	カミキリムシ科（和名未定）	
北海道	2015/8/19	ばれいしょ	ジャガイモシロシストセンチュウ	
大分県	2015/8/21	トマト	茎えそ病（仮称）（CSNV）	
大分県	2015/8/21	キク	茎えそ病（CSNV）	
神奈川県	2015/8/24	トマト	茎えそ病（仮称）（CSNV）	

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）				
発信元	日付	作物	内容	
佐賀県	2015/7/24	水稻	トビイロウンカ、コブノメイガの発生予想	
佐賀県	2015/7/24	果樹	果樹カメムシ類の発生状況と防除の徹底	
宮崎県	2015/7/27	茶	輪斑病	
宮崎県	2015/7/27	カンキツ	黒点病	
宮崎県	2015/7/27	果樹全般	果樹カメムシ類	
熊本県	2015/7/28	水稻	海外飛来性害虫の飛来状況	
鹿児島県	2015/7/29	果樹	果樹カメムシ類	
鹿児島県	2015/7/29	イチゴ	炭疽病	
長崎県	2015/7/30	イチゴ	炭疽病の防除対策	
長崎県	2015/7/30	水稻	いもち病の防除対策	
福岡県	2015/7/31	イチゴ	炭疽病の潜在感染状況	
鹿児島県	2015/8/4	カンキツ	黒点病	
熊本県	2015/8/7	水稻	トビイロウンカの発生状況	
鹿児島県	2015/8/10	水稻	トビイロウンカ	
鹿児島県	2015/8/17	大豆、野菜類、花き類	ハスモンヨトウ	
長崎県	2015/8/18	水稻	穂吸汁性カメムシ類の防除対策	
長崎県	2015/8/18	水稻	トビイロウンカの防除対策	
長崎県	2015/8/18	果樹	果樹カメムシ類の発生量及び飛来時期	
佐賀県	2015/8/18	イチゴ	炭疽病の防除対策	
熊本県	2015/8/20	イチゴ	ナミハダニの薬剤感受性	

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

**6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。**

農薬を散布するときには、農薬の飛散に注意しましょう！

- ・風向きに注意して風の弱いときに散布しましょう。
- ・散布の位置や方向に注意して散布しましょう。
- ・適正なノズルを用いて、適正な圧力で散布しましょう。



**農薬の散布前および散布後には、以下に
気をつけて農薬事故を未然に防ぎましょう！**

農薬を散布する前に注意すること

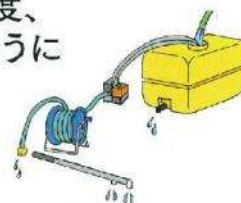
- ◎ ラベルをよく読んで、対象作物や散布時期を確認しておきましょう。

➡ 事前に確認することで、農薬の使用方法等の誤りを防止できます。

- ◎ 散布に使用する器具のチェックを行いましょう。

➡ 器具の不具合による農薬の事故を未然に防げます。

- ◎ 農薬の調整前には、事前に使用する農薬の散布濃度、散布面積等を確認し、必要量を調べて、余らないように調整しましょう。



農薬の散布後に注意すること

- ◎ 残った希釈液は河川、湖沼、用水路、下水等の水系に廃棄しないようにしましょう。

➡ 農薬が河川に流入し、魚などの水産動植物に思わぬ影響を及ぼす恐れがあります。

- ◎ タンクやホースは洗い残しが無いようきれいに洗っておきましょう。

➡ 前回使用した農薬をタンクやホース内に残したまま、別の作物に使用すると国が定めた基準値を超過する恐れがあります。

- ◎ 残った農薬による誤飲、誤用等を避けるため、他の容器（飲料用ペットボトル等）への移し替えは絶対に止めましょう。

➡ 移し替えた農薬を、誤って使用したり、誤飲する事故が発生しています。

- ◎ 盗難を防止するため、農薬の保管庫にはカギをかけましょう。



（佐賀県植物防疫協会パンフレットより）